
地の底から

ぴーまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地の底から

【Nコード】

N2943D

【作者名】

ぴーまん

【あらすじ】

人生に絶望した主人公Aがその後どのような末路をたどるのかを書いたフィクションです。

奴隷の人生

A「私にはもう生きている意味が分からないんです。」

B「他人は自分の鏡、他人の存在を通して自分の存在を確認できる。」

A「この地獄の底で誰が私の言葉に耳を傾けましょう？私は醜い。自分が思っている以上に。」

だからもう自分の姿を見たくない。だから他人とも触れ合いたくない。私は捨てられたの。」

B「孤独は耐えがたい。どんなに幸せそうに見えても孤独であれば人は幸せになれない。」

A「一体この世でどれだけの人が幸福だといえるのでしょうか。どうすればみなが幸福になれるのでしょうか。」

B「そのようなことを考える前に自分の幸せについて考えてみる必要があると思うが。」

B「いずれにせよ君はこの世に絶望し自らの手で命を絶った。ここは地獄の入り口。私はここの番人、君がそのままの考えでいるなら地獄の住人がふさわしいといえる。そこが地獄か天国かを決める要素は君自身の中にある。さあどちらの道を選択する？このまま現世をさまよいつづけることは意味がない。地獄に行くかもう一度転生して新たな人生をやり直すか。課題は君自身が生まれる前に設定すること。」

この広大な自然につつまれた青木が原樹海、人々がたちよらないそのわけは直感的にここが死への入り口であることを人々は悟っているから。もしこの広大な地に目隠しをされてへりかなんかでつれてこられて放置されればたちまちどんな人でも干からびるであろう。

まわりには人の死骸が散乱し野犬に喰われてその死骸は見るに耐えない。私はJR中央線を乗り継ぎ富士急行の最終地点富士吉田駅についた。手元には医者からもらった抗鬱薬、大量の睡眠薬、それに薬を飲むためのペットボトルに入った水があった。タクシーの運転手に青木が原の入りに向かうようお願いしたが何人も断られた。車で30分くらいで到達できるのにこんな夜中にそのようなところへ行くのは訳ありとすぐにわかるからだろうか。やっこの思いで一台つかまえ私は向かった。まだ秋なのにそこはすごく寒くて、否ここは標高が高いせいにかすく寒い。背中になにか寒いものがまとわりついてくるようなそんな感覚があった。あたりは真っ暗で車のヘッドライトさえ暗闇に吸い込まれる。何もない。本当に何もない。ただ当たり一面が重くて冷たい空気に覆われて私は生きたいという本能がどこに残っているのだろうか。恐怖を感じた。いまさら誰かに連絡をとるわけでもないが携帯電話の電波状況はすこぶるよかった。

A「私は辛いから逃げ出したのです。敗者。だからもういまさら挽回できないことは分かっています。みずから落ちていった。誰も助けてはくれなかった。」

B「君は限界を感じていたのだろうか？だから逃げ出した。その点は人間らしかったのだろう。」

A「私は永遠の眠りにつきもう何も感じたくないのです。」

B「そう願ってみなこの世を去っていった亡骸がそこいらへんに放置されているがこの亡骸を見て君は何を思う？」

A「遅かれ早かれ人は死に、みなこのような姿になる。それが生まれてきたものの必然、避けては通れない。火葬とはそのようなおぞましい姿を人にさらす前にこの世から消し去る方法。」

B「ならばなぜそう先を急ごうとする？すべてを終わらせれば楽になれるとも思っているのか？」

A「はい。そう思っています。ならばここには来ませんから。」

B「何か望みは？」

A「苦しんで死にたくありません。」

B「それは無理だ。この世で一生かけて味わうべき苦しみを今ここですべて使い果たさねば死ぬことはできない。」

B「君たち有機生命体が自然発生して以来、そこにはゴーストが宿った。否、初めにゴーストがあつた。初めはただの物質にすぎない分子の集合体にゴーストが宿った。君たちは長い年月をかけて生きたいと願うその意思を自らの設計図に組み込んだ。今度はその設計図を維持しようと必死に生存競争を生き抜いてきたのだ。」 B「だからその設計図は死ぬようには作られていない。」

私は小さなころから何事も全力で頑張ってきた。勉強も必ず一番だった。親からは愛情よりもむしろ恐怖をたくさんもらった。常に親の存在に恐れながら生きてきた。孤独に耐えながら頑張ることは普通以上にエネルギーを消耗させる。一流大学に合格してその中でも一番を貫き一流企業に入った。しかしそこで散々ないじめにあい耐えられなくなった私は逃げ出したのだ。命からがら。もう生きていくとするエネルギーはその時点で底をついていたのだ。人生の負け組みとなるのにそう時間はかからなかった。いままで生きてきて楽しい思い出など何一つない。気がついたら私は病院のベッドの上にいた。どうしてここにいるのかその経緯等わからない。意識を保つのが精一杯だった。否、ここは病院ではないようだった。多くの接続機器が私につながれて、はて、どこかで見たことあるような制御基盤、その制御基盤には見覚えがあつた。私が逃げ出したメーカで製造されていたものとよく似ていた。それが私の頭にどうやら接続されているようだ。状況が理解できなかった。

C「制御電圧正常誤差内」

D「冷却水注入開始します」

E「記憶フォーマット、OSの上書き正常終了」

F「ヒューマノイドニューラルネットワークインターフェイス正常
接続」

G「出力ゲイン要調整」

H「人格プログラムのインストールを開始します」

また視界が暗闇に変化した。それからどれくらいの時間が経過したのかわからない。

誰かの声がかすかに聞こえる。私の目の前には少女が一人立っていた。とても美しく

とてもはかなげ。それは幻想でも見ているようだった。

少女「私はあなたの中に書きされた記憶・人口プログラムです。」

私「は……？」

少女「私はこれからあなたと共に生きていくことになります。」

私「……？」

少女「だからあなたはもう孤独に打ちひしがれることもなくさみしくない。過去の記憶もほぼ

フォーマットしました。私がこれからあなたの上司。無事仕事を遂行すればあなたのメイン回路の幸福を感じるプログラムを起動してあげましょう。これはあなたのニューラルネットワークに幸福を感じる回路が埋め込まれていてそこにある一定周波数で電圧をかけ共振をおこしてあげるということです。これによりあなたはこれから私の言う仕事に幸せと生きがいを感じ、幸せに我が社の為任務を遂行することでしょう。」

私に与えられた仕事、それは原材料の調達だった。原材料となる人間を集めてきてこの製造ラインに運んでくること、およびその修復と改造、出荷であった。人間が人間を狩ることは違法であるが

少女曰く我らヒューマノイドがそれを行うことは違法ではない、我らは人間としてはすでに法律上は死んでいる。ただ遺体は法の下に厳重に解剖することは禁ぜられている。しかし本人が生きているま

まここにっれてこられ自らの改造に承諾した場合話は別と教えられた。それは手術と言われていた。製造されたヒューマノイドは高値で取引されていた。この大手企業の地下でそのようなことが行われていることなど政府のごく一握りの人間しか知らされていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2943d/>

地の底から

2011年1月26日08時03分発行